台湾高校生日本留学事業 第9期　留学中間報告

当協会の台湾高校生日本留学事業では、台湾の高校生が日本の高校に約11ヶ月間留学し、日本の高校生と同じ環境で生活を送りながら、日本の社会・文化・歴史等を学ぶ機会を提供しています。留学した台湾人高校生が将来知日派人材となり、日台間の架け橋として日台関係の更なる発展に寄与すること、及び受入校の日本人高校生等の台湾に対する理解を増進することを目的としています。2025年度派遣の第9期生は、2025年8月より留学を開始し、半年が経ちました。今回は、日本の高校生活の中で疑問に感じたこととそれに対する自分の考えについて、留学生3名の報告を紹介いたします。

根を張り、芽吹く

立命館中学校・高等学校　謝齊方

日本に留学してから、すでに5ヶ月が経過しました。私は留学する前、日本ではすごく周りの空気を読むことと礼儀を大切にすると聞いていました。私はずっと「周りに合わせる」ことは得意ではないためすごく心配でした。

不安を抱いて学校に入ると、おそらくこの高校が国際的な学校だからでしょう。クラスメートのみんなは外国人との付き合いにも慣れているようでした。クラスに入った時は、想像通りみんなからたくさん話しかけられるわけではなく、ただごく普通の転校生として受け入れられたように感じました。私は気が楽になりましたが、逆に適当な友達の作り方がわからなくて、一番友達を作りやすい時間を見過ごしてしまいました。でも今ではどんどんクラスメートに話しかけられるようになって、友達もできました。

最初に交流がそんなになかったおかげで、私は「日本人」という存在の観察機会がすごく多くて、おもしろいことを見つけました。その一つは思ったより抑圧感がないことです。もちろん基本的な協調性はありますが、でもほとんどみんなが「集団の前に、まずは個人であること」を意識しています。私の部活：ダンス部を例に挙げるとわかると思います。部員はパフォーマンスをする際に、練習する前の立ち位置は他の方と被らないように注意しますが、練習に入ったら、すごく自分に集中して、周りが何をやっているかはあまり気にならなくなります。私が元々ずっと観察している目はこの時、全てが自分自身に集中しました。他者を観察していた私の視線も、その瞬間、自分自身の内面へと引き戻されました。一番印象に残ったのは、ダンスが上手くて、私より入部が遅かった子です。その子は十分自分らしく生きていたのですが、練習に入ると周りが見えなくなるほどダンスに夢中になっていて、自分の世界に没頭しているようでした。たまに集中しすぎて先輩の指示を聞けなかったり、裏ルールを守っていなかったり、少し迷惑をかけてしまったりしたことはあるけれど、私は少し羨ましくて、尊敬しています。もちろん他の人に迷惑はかけたくないですが、それでも彼女のように自分自身に忠実になるのはいいなと思います。

そこで、私はこれまで外の世界や周囲にばかり向けていた視線を、自分自身へと戻し、改めて自分を見つめ直してみることにしました。すると、あることに気づいたのです。私はこの五ヶ月間、ずっとスポンジみたいに日本の全部を吸収していました。しかし、それだけではなく、自分の文化をもっと認識することができるようになったのです。木を喩えとすれば、この留学の機会があって、他の人と比べて違う栄養が吸収できて、特別な葉が萌えられます。でもそれだけではありません。友達や先生と話す時、たまに自分もよく知らない台湾のことを聞かれるから、その時にはしっかりと調べて返事をする。そうすることで根ももっと深く張れます。例とすれば、友達とお年玉について話したことがあります。「なぜ元宵節まで置くのか？」「なぜ赤い袋に入れるか？」それ

は幼い頃から先生やお年寄りからずっと聞いている物語なのに、時が経つにつれ、お年玉の意義も次第に忘れ去られていることに気がつきました。私は、友達に答えられない時、すごく恥ずかしいと思いました。しかし、お互いに交流したおかげで、もっと自分の文化を認識して、自分の「根」を張って、地上の葉を美しく芽吹かせると同時に、地下の根をしっかりと張って、より安定して立つことができるようになりました。これからも日本という環境から新しい養分を吸収して、新しい葉を広げ、交流を通して自分の文化という根をより深く、広く張っていきます。

イベント後、部活の仲間と撮った写真

一歩踏み出す勇気

曾悦恩 大阪府立夕陽丘高等学校

私が「留学生になりたい」と思ったきっかけは、「普通の学生になりたくない」という気持ちからでした。「もしこの一歩を踏み出したら、どんな景色が見えるだろう？」そんな期待を持って、一年間の努力を経て、やっと留学生になりました。でも、始まってみると、どんな高校生活が待っているかわからないし、友達ができる自信もない。不安を抱えながら、私が描いたアニメのような高校生活が始まりました。

登校初日、その光景はまさにアニメのワンシーンみたいでした。笑いながら登校する生徒たち、校庭で走っているサッカー部、廊下に貼られた色んな部活動の紹介ポスター。私は緊張しながらクラスに足を踏み入れました。自己紹介をして、台湾から持ってきたお菓子を配って、いよいよ休み時間が来ました。でも、誰も話しかけてくれない。だから私は勇気を持って、隣の席の子に「台湾のこと知っていますか？」と聞いてみました。すると「小籠包も台湾まぜそばも美味しいよね！」という答えが返ってきました。小籠包は有名なので理解できますが、台湾まぜそば……？「え…聞いたことないけど？」と、台湾人の私も聞いたことがない単語が出てきました。次の休み時間にすぐスマートフォンで検索したら、なんと名古屋発祥の料理！日本での高校生活初日は、この「逆カルチャーショック」のような驚きの中で終わりました。

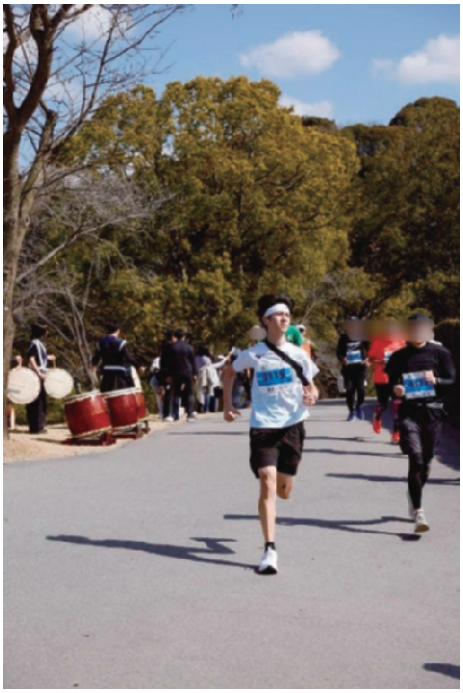
翌日、私は高校生活で一番ハードな授業を体験しました。それは体育の授業です。夏は暑いから早くプールに入りたいと思っていたけれど、一回授業を受けただけで「プールに入りたい」なんて気持ちは完全に消え去りました。入ってみたら、まるで地獄に足を踏み入れたような感じがしました。泳ぐ練習の量がとても多く、周りの子のスピードもとても速いです。皆「しんどい」と言いながらも、全然疲れていない様子で泳いでいました。私だけ授業が終わったら、階段を降りるのもしんどいと感じ、「なんで皆の体力はそんなに強いん？」と思いました。それはおそらく、小学校の時からずっとこんな凄い体育の授業に慣れているからだろうなと感じました。

夏の正反対、冬が来ました。唯一変わらないのは、体育の授業が相変わらず大変なことです。気温０度くらいの真冬に、半袖短パンで持久走をするなんて、これは本

当におかしいことだと思います。皆、長袖のジャージを持っているし、先生たちも寒いとわかっているはずなのに、半袖短パンはまるで法律みたいな存在でした。しかし寒くても誰も諦めず、皆が最後まで走り続けています。私も途中で何度もペースを落としたくなりましたが、「私だけではなく、皆も頑張っている。」そう思うと、それが力になって、最後の一歩まで走りきることができました。

授業以外にも、学校にはいろいろな部活動があります。私は書道に興味があって書道部に入り、カルタにも興味があったため競技かるた部にも入りました。しかし、この楽しい気持ちをクラスの友達に伝えた時、最初の返事は「書道とカルタ？私も書道は好きやけど、でも女子ばっかりやろ？」というものでした。「空気を読む」のは大事かもしれないけど、自分で自分の選択肢を消して、楽しいかどうかもわからないまま結論を出すのは、私の大嫌いなことでした。だからこそ、私は自分がやりたいことをやります。そのために一歩踏み出すのは、本当に重要なことだと思います。

ある日、友達が「持久走であんなに練習したんやから、マラソンも参加しようや！」と言ってくれました。私はこの一歩も必ず踏み出します。マラソンでも、持久走でも、部活動でも、勇気を持って前に進むこと。この先どんな景色が待っていても、この一歩を踏み出さないと、絶対に見ることはできないから。



この一歩の先に、見える景色を。

日本の高校生活にある青春

伊丹市立伊丹高等学校　徐惟熙

日本の文化は、ドラマやアニメなどを通して海外にも広く伝わっていて、そうした作品の中の学校生活に魅力を感じる外国人は少なくありません。実際に日本の高校に入って、理想と現実の違いや、あの雰囲気がどのように作られているのかについて考えるようになりました。ここでは、日本学校生活を送る中で感じたことや、日々の観察から見えてきたことを話したいと思います。

まずは部活動の文化について、日本は「部活が盛ん」という印象が強いですが、私が通っている高校では、勉強に集中したい人や、あまり部活に興味がない人も多く、部活に参加していなかったり、比較的ゆるく続けている人も少なくありません。一方で、私の台湾の高校では、限られた部活の時間以外にも、大会やパフォーマンスに向けて、毎日一生懸命練習している部活もありました。日本と台湾どちらにも部活に強く打ち込む人と、そこまで重きを置かない人はいますが、高校生の時期に、自分で決めた目標に向かって努力している姿は、部活であってもなくても、とても輝いて見える青春だと思います。

ただ、日本は台湾に比べて、部活に多くの時間を使うことが、より普通で自然な選択だと感じました。台湾は以前より状況は変わってきていますが、今でも部活に力を入れていると、「遊んでいる」「進学に直接関係ないことをしている」と見られてしまうことがあります。この違いは高校卒業後の進路選択と深く関わっていると思います。

学校の進路講座で知ったのですが、日本では高校卒業後に大学へ進学する割合は約6割で、大学以外にも、専門学校や就職といった選択肢が自然に存在しています。クラスには塾に通っている人も多く、学校としては大学進学を重視していますが、専門学校や就職を選ぶことも、特別ではない普通の進路として受け止められています。一方、台湾では高校卒業後に大学へ進学する割合が約9

割で、社会全体に「大学に行く必要がある」という空気が強くあります。そのため、高校は大学受験の準備段階として位置づけられ、授業時間も日本より長く、勉強が最優先で、部活や興味のある活動は「余力があればするもの」と捉えられがちです。

日本高校生活の「青春の雰囲気」は決まった形があるわけではなく、いろんな選択肢が許されている環境の中で、一人一人が自分なりに過ごしている結果だと感じました。社会の雰囲気をすぐに変えることは難しいと思いますが、台湾でも進路や興味の選択に対して、もっと多様さや包容力が認められるようになってほしいです。

こうした両方の状況を知ることで、自分が感じている違和感をより明確に理解できるように感じています。これからも日本での生活を通して、さまざまな選択や価値観に触れながら、自分なりの答えを見つけていきたいと思います。

家政部に入ったときのポップコーン歓迎会！